

中村一明先生を偲んで

竹内 章*

ファックス入電「中村一明先生超危篤、脳死状態」。ヤップ島から帰島中の白鳳丸船上であった……。1987年8月7日、東京大学山上会館で開かれていた1/100万第四紀地図についての座談会の席上、日本列島の地史やテクトニクスを陸だけでなく海との関連で全体的に理解するためには1/400万の小縮尺図も必要と説かれていた折、突然倒れられた。手を施しようもない程大量のクモ膜下出血。12日、遂に意識を取り戻すことなく、はかり知れない損失と惜しまれながら54歳で亡くなられた。先生の研究は火山・地震・地質・プレートテクトニクスなど多分野にわたり、国際交流の場でも重要な立場で活躍されているさ中であった。

中村一明先生との初対面は1975年夏、先生や宇井忠英さんが主宰するSF（応力場研究）グ

ループが仙台で開いた勉強会である。この時、天野一男さんの案内で下倉ダム周辺の岩脈群を観察する巡検があった。ありきたりの露頭観察を終えてふと見ると、先生は岩脈周縁にある気泡の一つ一つに細長い草の茎を差し込んでおられた。長軸の方向が揃っていることを示し、「マグマはこちらから入ってきたのですね」と言われた時の驚きは今だに忘れられない。全く新しい露頭観察法を教えられた思いであった。先生の議論は探偵物の謎解きに似ていて、野外室内を問わず、先生の非凡な観察眼と一見突飛な発想に同様の感動を経験した方は多い筈である。

先生が常々標榜しておられた Physical Geology。察するにそれは「地球の生理学」であった。地学現象に対する説明が意外なほど単



写真：天野一男さんの案内で仙台西方の下倉ダム周辺の岩脈群を観察したときのスナップ
(1975年筆者撮影)

純明解で、貫かれた論理性が強い説得力となっていたことはよく知られている。説明の出発点は必ず具体的な観察事実や観測データであった。ときには軒先に垂れ下がる雪までが引合いに出された。プレートの物質境界と力学境界、フィリピン海プレートの変針と相模トラフにおける抜け出し、日本海東縁の新生プレート境界、沈み込みと衝突の識別などの問題提起は、事象の時空スケール、分解能、認識のレベルなどが特別考慮されており、今後一層究されるべき重大な内容を含んでいる。細かい地質の説明でも畑違いの人々にまでよく理解されたこととは対照的に、日本の地殻変動論などは国内の一部構造地質家から「機械論」と批判されてきた。先生はこれに対する反駁を行わなかったことになる……。

深海掘削計画やリソスフェア計画などで国際的に指導的役割を果たしつつ、伊豆大島の噴火活動の監視と研究、日仏海溝計画の総括作業と、このところ文字通り忙殺的スケジュールをこなしておられました。余人が代わるところでない存在だったとはいえ、手を尽くせば先生の身体的負担は私たちが多少とも軽くすることができたのではないかと、残念でならない。余暇などという言葉とは無縁であった先生の凄烈な人生哲学の一端は、「私は無趣味・無宗教です」という言葉に表れている。

なお、先生の研究業績と学風については杉村新さんの一文「中村一明氏を悼む（科学，57，721-723，1987）。」を是非参照されたい